

## 「行雄と正太」

正太 （何かをかじりながら）  
おい！おめえ誰だ！？

行雄 え？

正太 おめえ誰だ！？

行雄 僕？

正太 おめえ以外にいねえだろ。おめえ誰だ？

行雄 僕は行雄だよ。

正太 おめえが行雄か！へえー。

行雄 僕の事、知ってるの？

正太 いいや。けど、おめえが行雄って事は今知ったから、  
これから聞かれたら「知ってる」って言ってやる。

行雄 そう。君は？

正太 おらぁ正太！みんなからは正太って呼ばれてる！

行雄 そう。

正太 （差し出して）食うか？

行雄 これは？

正太 みがきにしん。うめえぞ。

行雄 この棒みたいなの？

正太 おめえ、棒みたいとは何事だ。棒は棒でも、  
食べれる棒と食べれない棒があんだかな！

行雄 そうなんだ。

正太 なんだ、おめえ見かけない顔だけど、この辺のもんか？

行雄 ううん。

正太 じゃああれか。親とはぐれちまったのか。駐在さん呼んでくるか？

行雄 いいよ。はぐれたわけじゃないから。

正太 そうか、じゃあ遊ぶか？

行雄 え、君と？

正太 あったりめえだろ。他に誰がいるんだよ。

行雄 でも、今日は遊ぶものとか持って来てないし。

正太 何言ってんだ。こんだけ雪が積もってたらもう遊び放題じゃねえか。  
（雪玉を作りながら）  
ほれ、こんな風に雪玉を作ってだな。  
おめえは栗の木の棒を持て。

行雄 これ？

正太 これで思いっきりバーンって雪玉を打ち返してこい。

行雄 打ち返せばいいの？

正太 そうだ。いくぞー（雪玉を投げる）えーい！

行雄 やー（棒を振る）うわっ！

正太 はっはっは、雪玉が砕けて顔中が雪まみれだ。

行雄 何するんだよ！

正太 よし、今度はおめえの番だ。雪玉を投げてこい。

行雄 分かったよ。こうして（雪玉を作り）えい！

正太 おめえ、そんな投げ方じゃここまで届かねえだろ。  
雪玉ってのはな、こうやって投げんだよ。

行雄 うわっ、やめてよ！

正太 へへっ、悔しかったら当ててみろー。

行雄 はあはあ、ちょっとタイム。

正太 どうしたもう終わりか？

行雄 いや、もうこんなに投げてばかりだと疲れちゃうよ。

正太 だらしねえな。だいたい、おめえ雪に直（じか）に座ったら、  
尻がベチョベチョになってんだろ？

行雄 あ、しまった。

正太 そんな当たり前の事も分かんねえか。  
ま、いいや。せっかくだし、ちょっと温もりに行くか。

行雄 温もりって、どこに？

正太 あの神社の所に足湯ってのがあんだ。あったけえぞ。

正太 ほら、ここだここ。

行雄 ここって、外じゃないか。この水、冷たくないの？

正太 ここは温泉が流れ込んでるから、年中あったけえんだ。  
ほら、靴脱いで足つけてみろ。

行雄 本当だ。あったかい。

正太 だろ？これに入ったら体がじわーっとあったかくなってな。  
しょんべんちびりそうになるんだ。

行雄 汚いな。

正太 本当に出すわけじゃねえから。どうだ体がぽかぽかしてきたろ？

行雄 たしかに。ぽかぽかしてきた。

正太 なあ、俺とおめえは今知り合ったばかりだけど、  
一緒の湯に浸かったって事はもう友達だかんな。

行雄 そうなの？

正太 そうなの？って、何言ってんだおめえは。  
（お湯をかける）

行雄 あっつ！ちょっとやめてよ！

正太 はっはっは、面白れえなおめえは。  
友達だっておれが言ってんだから、  
おめえはうんって返せばいいだろ。

行雄 でも……。

正太 いいから言え。おめえとおれは友達だよな？

行雄 うん。

正太 よし！そいじゃ、おめえにとっておきの場所を教えてやっから。  
ついて来い。

行雄 これは？

正太 かまくらだ。見た事ないか？

行雄 初めて見た。

正太 おれもこんなでけえの見るのは今年が初めてだ。入ってみっか？

行雄 うん。

正太 見てみ。しっかりしてんだろ。これは佐藤のおっちゃんやみんなで  
1から作ったんだぞ。

行雄 すごいね。

正太 おれも雪を踏み固める手伝いをしたんだかな。

行雄 すごーい。

正太 だろ？おめえ、餅好きか？

行雄 うん。

正太 じゃあ、これ。

行雄 どこにあったの？

正太 そこの納屋にあったの、おれは知ってるんだ。

行雄 いけないよ、そんなの。

正太 1個や2個ぐらい分かんないって。

おめえ、七輪に火つけた事あるか？

行雄 無いよ。

正太 じゃあ、おれがやってやるよ。

こうやって、ほら。

行雄 すごい！正太君って何でも出来るんだ

正太 おれも火つけたのは初めてなんだ。

火で遊んでたら、親父にぶん殴られるからな。

こうやって餅を焼いて、ほら膨れてきた。

行雄 おいしそう！

正太 じゃ、食うぞ。

行雄 いただきます。おいしい！

正太 うめえな。

行雄 うん！今日はありがとうね！最初は

正太君の事がちょっと怖かったけど、

何か知らないうちに怖くなくなってたからさ、

これからも一緒に遊んでよ！

正太 できね。

行雄 何で？楽しくなかった？

正太 いいや、行雄と遊ぶのは楽しかった。けど、もう遊べねえ。

おれは明日から別の所に引っ越すんだ。

友達には言わないまま引っ越す事になったから、お別れも出来なくて。

会うのが嫌になって一人で歩いてたら、行雄、おめえがいたんだ。

友達の中で引っ越しの事を言うのはおめえだけだ。

行雄、おめえに言えて良かった。ありがとな。

行雄 ……さびしいよ。そんなのないよ！

正太 ごめんな。でも、おめえなら他の子ともうまくやってけるよ。  
だから、おめえは早く友達作れ。そいじゃな！

行雄 あとから他の子に聞いたけど、この辺りではダム建設などの大きな工事が終わったら、  
そのまま引っ越して次の現場に行ってしまう家庭が多らしく、  
正太の家もそんな家庭だったらしい。

それから冬が終わり、夏が来ると、地元ではあゆまつりが開かれた。  
鮎の塩焼きを売る屋台が並び、思い思いの浴衣を着た子どもや大人が  
みんなで夜空に打ちあがる花火を見て、歓声を上げていた。  
その時の僕は、「正太と一緒に見たかったな」と心の中で思った。

あれから30年。俺はずーっとこの町に残ってる。  
あれだけいた工事現場の作業員はいなくなり、地元の人間も段々減って  
いつしかあゆまつりも開かれなくなった。  
町はあの頃よりずいぶん静かになって、いつもひっそりとしている。  
そんな町に俺は残り、冬が来るたびにでっかいかまくらを作って  
正太が帰って来るのを待ってたんだ。  
ま、本当に来るかどうかなんて、途中からはどうでもよくなってたけどな。  
今では雪にも直に座らないし、一人で火をつけても怒られなくなったよ。  
ほら、あのスノーモービルを乗り回してる子が俺の娘だ。すげーだろ？  
おーい、あんまり遠くまで行くなよー！  
なあ、俺が焼いた餅、（横を見て）美味いか？

正太 ああ。あったかくて、しょんべんちびりそうだ。

行雄 正太。夏になったら、一緒に花火でも見ような。

（了）